

日本語教員志望学生の文法性判断—変化する敬語表現への意識—
Grammaticality Judgments by Students Aspiring to Become Japanese Language
Teachers: Awareness of "Changing Honorific Expressions"

天野みどり, 大妻女子大学
Midori Amano, University of Otsma Women's University

1. はじめに

文部科学省の認可による日本語教員の国家資格化が始まり、日本語教員養成課程の教育内容についても、現代社会の多様な日本語学習の課題をふまえた内容の充実が重要となった。発表者の所属する大学に新たに設置された日本語教員養成プログラムでも、現代社会における多様な日本語学習のニーズを理解し、柔軟な日本語教育を行う知識と技術の修得が求められるようになった。

発表者の主要研究分野は日本語文法理論であるが、その立場から、上記の新しい日本語教員の育成に貢献できる一つの項目として、日本語母語話者および日本語熟達者の文法性判断能力に関する理解の深化があると考ええる。

本研究では、その考察の基礎として、日本語教員志望学生の文法性判断能力を調査する。本研究の目的は、日本語教員志望学生が多様で流動的な現代日本語の文法性判断を各自でどのように行っているか、その多様性・流動性をどの程度理解しているか、さらに、流動的な日本語を日本語学習者に教育することをどのように意識しているかを、質問紙調査により明らかにすることである。

調査協力者は、日本語教員養成プログラムを受講していない、大学1年生（入学時）130名と、同プログラムを受講中で、かつ日本語文法論ゼミ・文法論に関わる日本語学の演習科目を学修している2・3年生6名である。

文法性判断の主たる調査項目は、規範から逸脱する現代敬語表現、および文法的には逸脱していなくても、場面・文脈によっては適切でないとされる現代敬語表現「（聞き手に関与の無い行為についての）～か（さ）せていただく・（行為要求の）お/ご～いただいてもよろしいですか・（非人物に対する行為の）粉砂糖をふってあげてください」等である。同表現についての菊地（1997）・塩田（2025）の調査結果と比べ、逸脱表現の拡大・縮小の様相と、そのような言語状況に対する日本語教員志望者の多様な意見から、養成課程の目的とする、柔軟な日本語教育の実現に向けた文法論・語用論研究の果たす役割について考える（以下、文法の適格性ではなく容認性を問うているため、本稿では容認度調査と呼ぶ）。

さらに、調査項目には、日本語学習者に敬語表現を指導する意識を問うものも含めた。この項目を遠藤（1990）の調査と同一にすることにより比較検討を行い、敬語教育に関する意識の変化と今後の課題について考える。

2. 先行研究

2.1 容認度低下文に関する先行研究

容認度低下文の調査を行う先行研究として本研究で参照したのは、菊地（1997）と塩田（2025）である。

菊地（1997）では、（1）〈私どもが正月をハワイで過ごすこと〉は発話相手に関与しない事態であり、調査の結果、容認度が非常に低かったことが報告されている。

（1）私どもは、正月はハワイで過ごさせていただきます。

〔（さ）せ（＝使役）＋ていただく〕という形式は、発話相手の＜許可をいただく＞という意味を表すために、発話相手に関与しない行為に用いると不自然だと感じられるのである。菊地（1997）の調査は社会人 103 人に対する容認度調査であったが、30 年近くが経過している現在の若年世代の容認度はどのようなものであるか、確かめる必要がある。

次に、塩田（2025）の調査の例を見ておく。

（2）ご注文の品はおそろいになりましたでしょうか。

塩田（2025）の記述によると 2007 年の調査の結果、（2）を「問題ある」としたのは 20 代が 38%、30 代が 38%、40 代が 55%、50 代が 51%、60 代が 48%であり、50%以上が「問題ある」とするのは 40 代以上だということである。これも、調査から 20 年近くが経過しており、現代の大学生の容認度がどのようなものかを確かめる必要がある。

2.2 敬語・敬語教育の意識に関する先行研究

本研究では、敬語・敬語教育についての意識に関する先行研究として遠藤（1990）を取りあげる。遠藤（1990）の調査は、東京近辺留学生 103 人、国際交流基金短期研修教師 31 人に対するものである。この調査の結果、遠藤（1990）は以下のようなことを明らかにしている。

- ・日本語学習者は、敬語は難しいと感じている。また、非日本語母語話者で日本語教師である者のように学修歴が長い程、難しいと回答する率が高くなる。
- ・敬語の難しい点は、謙譲語の使用・相手や場面の使い分け・相手との関係性の把握とする者が多い。
- ・敬語教育に対するニーズとして、簡素化の希望・敬語よりも内容重視の希望が多いが、日本文化として大切にすべきという意見もある。

遠藤（1990）の調査から 36 年が経過しており、日本語学習の目的の多様化、日本社会の変化を背景に、現在の敬語教育の方針がどうあるべきかについて、志望学生の意識を確かめる必要がある。

3. 調査と考察

以上の先行研究の指摘をふまえて、質問紙調査を行った。調査はⅠ～Ⅲに分けて行った。調査協力者は以下の表 1 の通りである。

容認度調査の調査Ⅰ・Ⅱは、自然で容認できる＝○・少し不自然だが容認できる＝△・全く不自然で容認できない＝×の 3 段階で判定してもらった。以下、容

認度調査の結果は、○を2点、△を1点、×を0点に換算し、その平均点（小数点第3位を四捨五入）で示す。

表1 調査協力者

調査Ⅰ 接続助詞化の容認性	A 養成前の大学入学時1年生 130人（以後入学時生）	B 養成課程履修中の2・3 年生6人（以後履修生）
調査Ⅱ 変化する敬語形式の容認性	A 養成前の大学入学時1年生 130人	B 養成課程履修中の2・3 年生6人
調査Ⅲ 敬語・教育についての意識	実施せず	B 養成課程履修中の2・3 年生6人

3.1 調査Ⅰ：接続助詞化の容認性調査

調査Ⅰは、敬語表現ではない例文に関する容認度を確認するために行ったものである。

- (1) 駅で酔っぱらいが騒いでいたのが、警官に捕まった。
- (2) リンゴがハンカチの上に置いてあるのが、ピカピカに輝いている。
- (3) 先日は集合場所を教えてください、ありがとうございました。

表2 ノガ接続助詞化の容認度

	例文 (1)	例文 (2)	例文 (3)
A 入学時生	0.84	0.34	非調査
B 入学時生	0.93	0.43	1.94
C プログラム履修生	1.17	0.5	2

(1) は「のが」の接続助詞化の慣習の度合いを測る、容認度調査である。この例は、文全体で変化を表し「～のが～に変化した」の型による理解がしやすいものであり、A～C のいずれも、1 (=△) 前後の容認度の結果となった。(2) はいわゆる主要部内在型関係節文である。これは、0.5 以下と、×に近い結果となった。(3) は非逸脱文である。逸脱的特徴のある文との容認度の違いを確認するために行った。これは、いずれも2 (=○) に近い結果となった。

以上の調査の結果は、天野（2026 予定）が示す、現代における主要部内在型関係節文の容認度の低さを裏付ける結果であり、同じ逸脱的な文であっても接続助詞的ノガの文の容認度の方が高いことを示している。このように、敬語文以外の容認度調査の結果は、履修生の方が高めに容認される点が注目されるが、入学時生も履修生もほぼ同様の例文間の差を判断することがわかった。こうした容認性の基準は、プログラム履修生か否かといった専門的知識の有無にかかわらず、日常の言語使用で培われるものであることを示している。

3.2 調査Ⅱ：変化する敬語形式の容認性調査

調査Ⅱは、変化する敬語文の容認性調査である。調査例文と調査結果を表3に示す。

表 3 変化する敬語形式の容認度

	例文	A 入学時 生	B 入学 時生	C 履修 生
(1)	ご注文の品はおそろいになりましたでしょうか	1.53	1.44	1
(2)	(看護師が患者に) ご自分で腕をよくもんであげてください	1.47	1.59	2
(3)	お名前をお書きいただいてもよろしいですか	1.37	1.4	1.67
(4)	部長、先日企画書を書いてお机に置いておきました が、ご覧になりましたでしょうか	1		0.67
(5)	机の上に企画書を置きましたが、ご覧になりましたで しょうか	非調査	1.31	
(6)	(学生が教師に) すみませんが先生の本を使わせてい ただけないでしょうか	1.55	1.65	1.5
(7)	(近所の人に) 私どもは、正月はハワイで過ごさせて いただきます	0.98	1.09	1
(8)	先日は集合場所を教えてください、ありがとうございます	非調査	1.94	2

調査の結果として特に興味深い点を述べる。例文(2)は、無生物に対する「～てあげる」の使用である。この容認度は平均点 1.47 以上と、A～C のどのグループも高い結果となった。特に、履修生は全員が○と回答しており、無生物に対する「～てあげる」文がかなりの程度慣習化されていることを伺わせる結果となった。

塩田(2025)では(2)のような無生物に対する尊敬語形式を「問題ある」とするのは40代以上が多かった(塩田(2007)調査:20代38%・30代38%・40代55%・50代51%・60代48%)が、さらに若年世代を中心に慣習化が進んでいる可能性がある。

例文(6)(7)は「～(さ)せていただく」文の容認度である。(6)は発話相手の許可が必要な事態の例、(7)は発話相手の許可が不要な事態の例であり、菊地(1997)では両者に大きな容認度の差があった。菊地(1997)の調査結果(協力者103人)では、(6)を自然と判断したのは90人、不自然と判断したのは10人であるのに対し、(7)を自然と判断したのは5人、不自然と判断したのは93人であった。

今回の調査でも、(6)の方が(7)よりも容認度は高かった。しかし、(7)はどのグループも1点(=△)に近いものであり、菊地(1997)の(7)の結果とはかなり異なると言える。これも、1997年の頃よりも慣習化が進んでいることが考えられる。

3.3 調査Ⅱ：敬語形式の不自然さの理由調査

調査Ⅱでは、変化する敬語文の容認度とともに、△・×に判定した場合、その不自然さの要因も説明するよう指示した。その結果から、△・×という容認性の

判断が、調査者の予測とは異なる観点でなされる場合があることがわかった。以下、結果を表4に示し、その後、注目される点を述べる。

表4 変化する敬語形式の不自然さの理由（全理由に占める率%）

	理由	入学時生	履修生
(1) ご注文の品はおそろいになりましたでしょうか	①無生物主語に対する尊敬語文だから	1.8	0
	②過剰敬語（丁寧語の重複）だから	94.6	100
	③その他	3.6	0
(2)（看護師が患者に）ご自分で腕をよくもんであげてください	①無生物に対する～テアゲルだから	85.1	0
	②その他	14.9	100
(3) お名前をお書きいただいてもよろしいですか	①過剰敬語（恩恵授与＋許可）だから	29.6	50
	②その他	70.4	50
(4) 部長、先日企画書を書いてお机に置いておきましたが、ご覧になりましたでしょうか	①自分への行為要求なのに恩恵授与が無い	8.1	13.3
	②過剰敬語（丁寧語の重複）だから	35.5	33.3
	③その他	56.5	53.3
(5) 机の上に企画書を置きましたが、ご覧になりましたでしょうか	①自分への行為要求なのに恩恵授与が無い	19.6	非調査
	②過剰敬語（丁寧語の重複）だから	43.5	
	③その他	37	
(6)（学生が教師に）すみませんが先生の本を使わせていただけないでしょうか	①～サセテイタダクが不自然	16.7	0
	②その他	83.3	100
(7)（近所の人に）私どもは、正月はハワイで過ごさせていただきます	①～サセテイタダクが不自然	32	50
	②その他	68	50

(1) の不自然さの理由を無生物主語に対する尊敬語文だからとするものは、入学時生の 1.8%のみであり、履修生の述べる理由の 100%が過剰敬語（丁寧語の重複）とするものであった。つまり、履修生は「ました＋でしょうか」ではなく「ましたか」にするべきなどを不自然さの理由としていたのである。同様に (4) も、塩田（2025）によれば、発話者への行為を発話相手に要求する場面であるにもかかわらず、恩恵授与の「～ていただく」が無いことが、違和感の理由であるが、これを理由として述べたものは入学時生 8.1%、履修生 13.3%のみで

あった。ここでも「過剰敬語（丁寧語の重複）」を理由とするものが多く、入学時生 35.5%、履修生 33.3%であった。

この結果からは、変化する敬語形式を不自然とする回答の中には、個々の形式がもつ従来の用法からの逸脱に違和感を抱くのではなく、単に、過剰に敬語形式が重複していることに対して違和感を抱くものが一定数存在するということがわかる。

(7) の「～（さ）せていただく」も、発話者に許可してもらう事態ではないのに用いていることの不自然さを指摘したものは、入学時生 32%・履修生 50%に留まった。(7) のその他の理由として、「私ども」が不自然とするものが 31 件と最多であり、「～（さ）せていただく」の使用を問題とせず、それ以外の要素について問題とするものがかなり多い結果となっている。また、その他の 26 件が、「近所の人に使うには丁寧すぎる」「かしこまりすぎ」など、明確に「許可+いただく」の理由とは説明せずに、全体的な敬意表明の過剰さを述べたものとなっていることも注目される。

この結果からも、(7) の「～（さ）せていただく」の容認度が菊地（1997）の調査よりも高いというだけではなく、不自然さがあるとするものの中にも、従来の「～（さ）せていただく」からの逸脱を不自然とするのではないものが混じっていること、つまり、菊地（1997）の時点での不自然さの理由がわからなくなっているほどに、若年層での変化が進んでいる可能性があることがわかる。

3.4 調査Ⅲ：敬語についての意識調査

次に、調査Ⅲの敬語・敬語教育についての意識を問うた結果を示す。遠藤（1990）の調査項目と同一にして調査した。その結果は以下の通りである。

まず、敬語についてどのように考えるかである。

表 5 敬語についてどのように考えるか (%)

	遠藤（1990）調査 非母語日本語教育者	発表者（2026）調査 プログラム履修生
敬語はもっと簡単にした方がよい	40.3	16.7
敬語はもっと大切にした方がよい	17.9	66.7
敬語は難しいので、外国人には要求しない方がよい	32.8	16.7
話の内容の方が大切だから、敬語をあまりうるさく言わない方がよい	39.6	0
敬語を上手に使えなくても、そのことで人を評価しない方がよい	32.8	33.3

「敬語についてどのように考えるか」について興味深いのは、遠藤（1990）では「簡単にした方がよい」が 40.3%で最多であったのに対し、2026 年の本調査では、16.7%と少なく、逆に、遠藤（1990）で最少の 17.9%であった「もっと大切にした方がよい」が最多 66.7%であったことである。2026 年調査は、「外国

人には要求しない方がよい」「敬語をあまりうるさく言わない方がよい」も、遠藤（1990）よりも少ない結果となっている。

ただし、遠藤（1990）とのこの結果の相違は、遠藤（1990）の調査協力者が日本語教師ではあるが日本語非母語話者であることが関係しているのか、2026年調査の協力者が履修生であって実際の日本語教師ではないことが関係しているのか、あるいは時代の異なりなのかは今回の調査からはわからない。今後の課題としたい。

3.5 調査Ⅲ：敬語教育への意識調査

次に敬語教育への意識調査の結果は以下の通りである。

表6 外国人に日本語を教えるとしたら敬語についてどのように考えるか（％）

	遠藤 1990 調査 非母語日本語教育者	2026 調査 プログラム履修生
失礼にならない程度の簡単な敬語だけ教えたい	66.70%	83.30%
できるだけくわしく、日本人母語話者と同じように使い分けられるまで教えたい	25.90%	16.70%
敬語の形や種類をたくさん教えても実際には使わないから、必要最小限を選んで教えたい	37.00%	16.70%
敬語にあまり時間をかけないで、新しい文型・言葉・漢字などを教えるのに時間をかけたい	25.90%	0%

3.4 で示したように、2026年調査では「敬語はもっと大切にしたい方がよい」という意識が最多であったということから、この履修生たちは外国人にもしっかりと敬語を教育したいと考えているのではないかと推測されるが、結果は、「失礼にならない程度の簡単な敬語だけ教えたい」が多数という、簡素化志向を示すものであった。むしろ遠藤（1990）の調査の方が、できるだけくわしく教えたいとするのが 25.9%もあったことと対照的である。現代の若年層は敬語を大切にしたいと考えているが、自身の使用する敬語は簡素化傾向にあり、そのために、日本語学習者に教える際にも簡素化した日本語を教えるのがよいと認識しているように推測されるが、詳細は今後の調査の課題としたい。

4. 結論

天野（2022）では、日本語文法論研究において、事例観察調査と内省判断調査の二つは、短所を補い合う、ともに重要な研究手法であることを論じた。日本語教員養成プログラムに含まれている文法関係の授業でも、この二つの研究手法を用いて日本語文法研究を進めていく技術を修得することを、授業目標の一つに設定している。

日本語教員養成プログラムを履修中の2・3年生は、文法論や語用論の授業を多数受講し、容認性判断が個人により異なりながらも傾向性があることを理解し、変化する言語現象に対する自らの容認性判断や、不自然さの理由を考察する機会が多いはずである。しかし、本調査によって、入学時生と日本語教員志望の2・3年生では、後者の方が全体的に新しい表現に対する容認度が高いことがわかった。また、後者に、容認度の低下を認識しても、その要因を言語化して示す力が習得できているとは言えないことがわかった。ただし、今回の調査では、日本語教員養成プログラムの履修生の調査協力者が6人と少なかったため、正確な調査とその結果に基づく考察は、今後の課題とする。

調査協力者の不足を差し引いても、本調査からは、日本語教員養成プログラムにかかわる文法論関係の授業の学びから、積極的に、社会を構成する多様な人々の全体的な日本語に対する容認度を考慮して、現代日本語の文の意味や文法性を分析し説明していこうとする力が育成されてはいないように思われた。

敬語文といった、変化が頻繁に起こる現象を日本語学習者に指導するにあたり、その基盤となる日本語における敬語の役割を深く理解させながら、文法論で培う内省判断力を生かし自ら揺れ動く言語現象を説明できるように育成する方策を、文法論研究者としてさらに考えていく必要がある。

参考文献

- 天野みどり（2022）「現代日本語文法研究の二つのアプローチに関する考察」
『大妻国文』53,1-17 大妻国文学会
- 天野みどり（2026 予定）「構文の拡張と文法の逸脱」澤田淳編『シリーズ日本語文法研究 第1巻:意味、構文と文法（仮）』くろしお出版
- 遠藤織枝（1990）「日本語学習者の望む敬語教育—アンケート調査から—」『言葉と文化』3,1-16 文教大学
- 菊地康人（1997）「変わりゆく「させていただく」」『言語』26（6）,40-47 大修館書店
- 塩田雄大（2025）『ゆるる日本語、それでもゆるがない日本語』世界文化社